

社教ひろしま

特 集

ウェルビーイングの実現と 社会教育委員の役割 ～次世代を担う青少年の育成を通して～



令和7年3月 No. 71

広島県社会教育委員連絡協議会

【ウェルビーイングとは】

- 身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。
- 多様な個人がそれぞれ幸せな生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念。

第4期教育振興基本計画（令和5年6月16日閣議決定）

【参考】文部科学省 HP (https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/)

社教ひろしま 第71号

特集 ウェルビーイングの実現と社会教育委員の役割

～次世代を担う青少年の育成を通して～

I	巻頭言	
	社会教育の力を発揮して、地域と人をつないでいきましょう!!	2
	広島県社会教育委員連絡協議会会長 林 孝	
II	寄稿	
	ウェルビーイングを希求する生涯学習・社会教育	4
	広島修道大学 教授 山川 肖美	
III	実践報告	9
	① 次世代を担う青少年のために	
	安芸太田町教育委員会教育課	
	② 呉市における社会教育委員の役割と取組	
	呉市文化スポーツ部文化振興課	
	③ 「地域の手づくり芸術祭せらポン!」の取組	
	世羅町教育委員会社会教育課	
	④ 青少年が「主語」となる社会教育の道筋へ	
	府中市社会教育委員会議議長 岡本 由姫美	
	⑤ 子どもたちが安心できる居場所づくりと地域連携を目指して	
	広島市社会教育委員 竹澤 真奈美	
IV	令和6年度広島県社会教育委員研修会報告	19
V	表彰	30
	1 令和6年度全国社会教育委員連合表彰	
	2 令和6年度広島県社会教育委員連絡協議会表彰	
	3 令和6年度社会教育功労者表彰	
VI	大会報告	33
	第66回全国社会教育研究大会茨城大会	
	第46回中国・四国地区社会教育研究大会徳島大会	
VII	令和6年度事業概要	36
	(資料) 広島県社会教育委員研修会(旧広島県社会教育研究大会)開催記録	38

I 巻頭言

社会教育の力を発揮して、地域と人をつないでいきましょう!!

広島県社会教育委員連絡協議会会長 林 孝

令和6年6月10日、社会教育法制定75周年の節目を迎えました。

この間に社会や教育を取り巻く環境は大きく変化しています。特に近年は、「VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）」の時代と言われるように、少子高齢化の進行による人口減少、グローバル化の進展、DXの推進や生成AIの出現など、将来の予測が困難な時代を迎えています。地域においては、教育力やコミュニティ機能の低下、つながりの希薄化など様々な課題に直面しています。



このような状況の中、社会教育に求められる役割やニーズは変化しており、私たちは社会教育の意義、社会教育委員の役割を再確認する必要があります。周知のとおり、社会教育は、学校教育の領域を除いた「主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）（社会教育法第2条）」を対象とし、「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行われる教育（教育基本法第12条）」として、「生涯学習の理念（同法第3条）」に基づく生涯学習社会を実現する上で中核的な役割を担っています。また、地域住民がともに学ぶものであり、地域コミュニティ形成の営みという性格を有していることから、まさにこれからの時代に求められているものと言えます。

ところで、令和5年6月16日に閣議決定された「第4期教育振興基本計画」では、「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」がコンセプトとして掲げられています。この計画は、社会教育を含む教育の未来を指し示すものです。私たち社会教育委員には、地域の実情に合わせて「地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現」に向かって社会教育の振興に尽力するとともに、「学校・家庭・地域の連携・協働の推進による地域の教育力の向上」に寄与することが期待されています。

そこで、社会教育委員が、社会教育の力を発揮して地域や人をつないで実現が目指される「調和と協調」に基づくウェルビーイングの視点について、まず確認します。そして、地域と人をつなぎ、人と人々が協働するために求められるキーワードについて、「ともに」考えていきたいと思います。

まず、「日本社会に根差したウェルビーイング」について、日本の社会・文化的背景を踏まえて、①自己肯定感や自己実現などの「個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング（獲得的要素）」と、②人とのつながりや利他

性、社会貢献意識などの「人とのつながり・関係性に基づくウェルビーイング（協調的要素）」の2要素が指摘されました。そして、これらの2つの要素を調和的・一体的に育むことで、日本社会に根差した「調和と協調」に基づくウェルビーイングの向上が目指されると指摘されました。

では、この将来予測が困難な時代に、「日本社会に根差したウェルビーイング」を追求して活力あふれる持続可能な社会を実現していくために必要とされるのは何か。それには人の力が不可欠であり、人と人の協働が鍵となってきます。その鍵となる「協働のプロセス」を動かす「チームワーク」が不可欠です。しかもリアルタイムで相互依存性の高い取組を可能にする「チームワーク」の発揮が必要とされます。そこで、そのためのキーワードを4つ提示してみます。

第一のキーワードは、「心理的安全性」です。協働にあたっては、学校・家庭・地域がお互いに自然体で本音が言い合える関係づくりが必要です。安心できる環境で、失敗を恐れず、自分の意見を自由に表現することができる「心理的安全性」を確立するよう努める必要があります。

第二のキーワードは、「文脈共創」です。自分たちの中で共通する当たり前だと思う感覚を「ともに」紡ぐことです。メンバーが同じ文脈の上で、足並みをそろえて、未来に向かって「ともに」創り出すこと、すなわち、共創が重要です。

第三のキーワードは、「当事者意識」です。社会教育委員は、社会教育に関する計画の立案や調査研究などに関して教育委員会に助言をする役割を担っています。各自が当事者として、わがまちの社会教育に必要な視点や取組を考えるのです。単なる「評論家・分析家」に陥ることなく、問題を引き受けるという「当事者意識」のある姿勢をもって臨むことが重要です。

最後のキーワードは、「視座共進化」です。関係するメンバー間で、共通の目標や方向性に向かって視座を一致させていく上で、一人一人の考えの異なりを排除するのではなく共有していくことです。メンバー同士が目標や方向性を確認しながら、お互いの考えを共有し、熟議しながら、未来を「ともに」創り出そうという意欲につなげることが重要です。

このようなキーワードのもとに人々が様々な主体と協働することを通じて、「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の好循環を生み出し、個人と地域全体のウェルビーイングの向上に尽力する社会教育委員にエールを送ります。

社会教育法制定75周年を機に、地域と人をつなぐ社会教育の力を最大限に発揮し、未来を拓く協働のネットワークを創造していきましょう。

【参考文献】

中土井僚「ビジョンプロセッシング ― ゴールセッティングの呪縛から脱却し「今、ここにある未来」を解き放つ ―」（英治出版, 2024, 467-480 頁）

第4期教育振興計画リーフレット（https://www.mext.go.jp/content/20230928-mxt_soseisk02-100000597_07.pdf, 2025. 2. 25 取得）

Ⅱ 寄稿

ウェルビーイングを希求する生涯学習・社会教育

広島修道大学 教授 山川 肖美

1 教育振興・生涯学習推進におけるウェルビーイングへの希求

(1) 第4期教育振興基本計画とウェルビーイング

ウェルビーイング (Well-being) は、2030 年に目標達成の区切りを置く SDG s と密に関わりつつかつ時にそれを超える概念として広がりを見せており、国や地方公共団体にとどまらず、企業や NPO 等多様なステークホルダーが共通に希求する拠り所となりつつある。第4期教育振興基本計画 (令和5～9年) でも鍵概念として位置づいたウェルビーイングは、



「身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。」と規定され、その実現が本計画の主に目指すところの1つにある。

同計画では、第11期中央教育審議会委員でもある内田有紀子を中心としたウェルビーイングの国際的な比較調査等に拠りながらⁱ、欧米的な文化的価値観に近い、自らの人生が理想的な状況にあること等に満足感を持つ「獲得的幸福観」と、日本でより重視される傾向にある身近な周りの人との良好な関係性があり、それが安定的に維持されていること等に満足感を持つ「協調的幸福観」という2つの要素が提示され、両要素を調和的・一体的に育む日本型ウェルビーイングの実現を目指すことが求められている。さらに、この日本の特長である「調和と協調 (Balance and Harmony)」に基づくウェルビーイングの考え方を国際的に発信することも企図している。

(2) 生涯学習推進とウェルビーイング

生涯学習政策においてはこれより1年前の「第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理～全ての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支えあう生涯学習・社会教育に向けて～」においてウェルビーイングの実現と実現に向けての生涯学習の役割が提示された。

上記第4次教育振興基本計画策定時の諮問「誰もが、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学ぶことができ、誰一人取り残されず、一人一人の可能

性が最大限に引き出され、一人一人の多様な幸せであるとともに社会全体の幸せでもあるウェルビーイングが実現されるように、制度等の在り方を考えていく必要」という問題意識を共通の問いとして持つ。

「学びあう、教えあう、助け合う、励ましあうといった相互性に支えられながら、一人一人が主体的・持続的に学んでいくという生涯学習」は多様なウェルビーイングの実現に向けて重要であり、かつ、その実現に向けては、「個人」に着目するだけでなく、その個人の家族・友人をはじめ日常的に関係を持つ「他者」、その個人が住む地域・国といった個人が置かれている「場（文化・環境）」に着目することが重要だと書かれている。

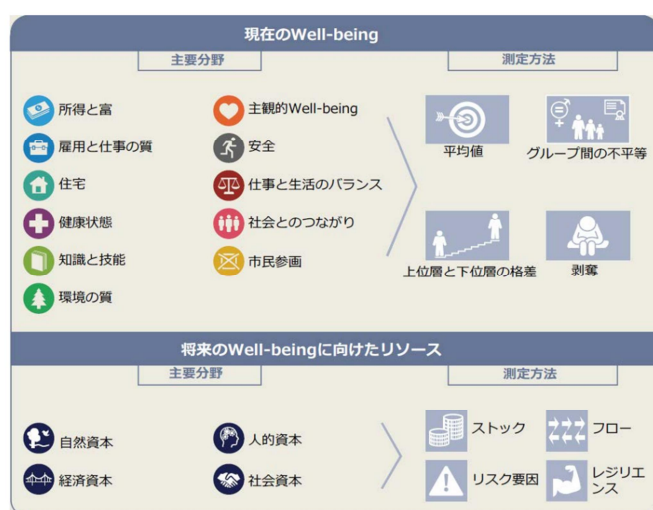
つまり、個人の幸せとその人と日常的に関係を持つ他者や家庭・地域・社会の環境の幸せな状態の両存・循環を目指す。

2 ウェルビーイングの枠組みと生涯学習・社会教育

(1) ウェルビーイングの枠組みと指標

ウェルビーイングの枠組みや指標は、特性や対象、領域等別に、主観的指標・客観的指標、総合的指標・分野別指標、子ども用指標、教育面での指標等多様に展開されているⁱⁱ。国や国際機関においてもそれぞれの特性の下で指標と枠組みが提案されているⁱⁱⁱ。

例えば OECD（経済協力開発機構）は 2011 年に各国のウェルビーイングを多面的に計測する「より良い暮らしイニシアティブ（Better Life Initiative）」を開始し、加盟国におけるウェルビーイングの動向をモニターするための「Well-being フレームワーク」を開発した（図 1）。比較的標準化された指標として多くの国の研究者や政策策定者等の間で多用されている^{iv}。



（備考）Mahoney（2023）から抜粋したものを和訳。

図 1 OECD によるウェルビーイングの枠組み

また近年日本ではデジタル庁がデジタル田園都市国家構想実現に向けて地域幸福度（Well-Being）指標の活用を促している。地域幸福度（Well-Being）指標とは、市民の「暮らしやすさ」と「幸福感（Well-being）」を数値化・可視化する指標であるが、当該 HP で都道府県別や市町村別に比較的簡単な操作でそれを把握できる。項目間や性別、年齢別での相対的な強弱や他都市との比較もできるので、都市の地域幸福度としての強みと弱みの把握も可能である。図 2 はそれを活用した広島県のデータである。デジタル生活や自己効力感で主観と客観に比較的差があることがわかる^v。

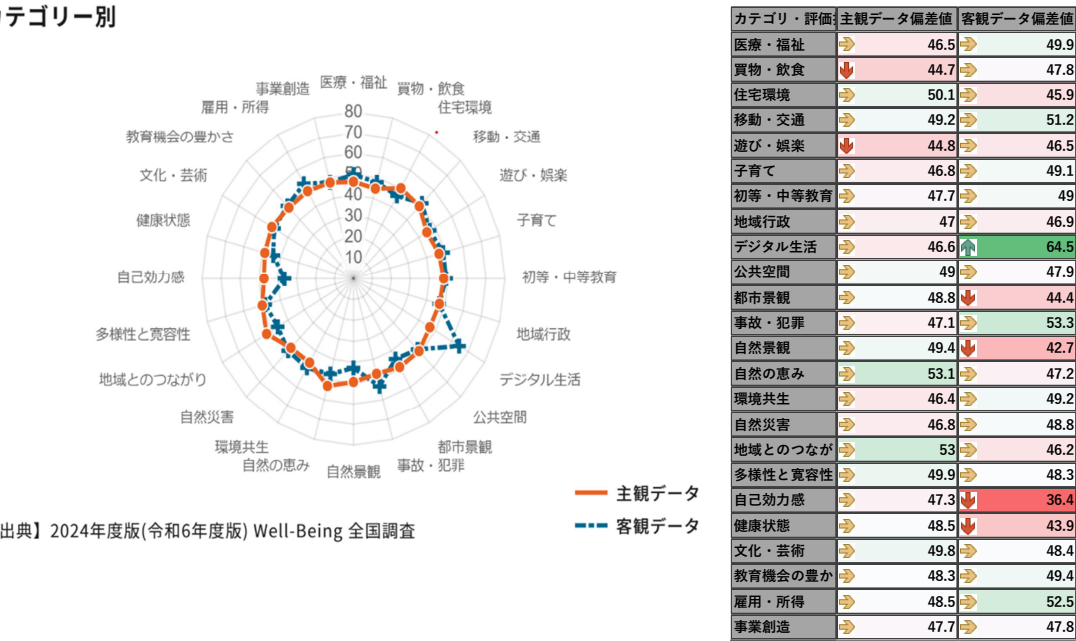


図 2 地域幸福度（Well-Being）指標を使った広島県のデータ

（2）ウェルビーイングの指標と生涯学習

上記指標のなかに生涯学習・社会教育の明示はないが、上記指標の多くが学びの過程や成果と密接に関わるものであることが見て取れる。「教育機会の豊かさ」はまさにそのものであるが、それ以外の、「子育て」や「デジタル生活」、「環境共生」、「健康状態」等すべての項目について生涯学習・社会教育が関わっていないものはないであろう。

表 1 学習の社会的成果

	(A) 個人の成果	(B) 公共の成果
① 金銭的成果	収益、所得、富、生産性	税金 社会移転コスト ヘルスケアコスト
② 非金銭的成果	健康状態 生活への満足	社会的凝集性 信頼 よく機能する民主主義 社会的安定

表1は、OECDによる学びの社会的成果として調査結果を整理をしたものである^{vi}。ここからも、学びの過程や成果が、公共財として、個人にとっても社会にとっても、金銭的にも非金銭的にも有意なものであることが見て取れる。とりわけ、着目したいのは、非金銭的成果の2つの象限である。ウェルビーイングな状態を維持する社会のインフラとしての生涯学習の重要性を示している。世界各都市において学習都市(Learning Cities)^{vii}を標榜するのもそれゆえであろう。

3 生涯学習・社会教育への新しい視座—コンパッション・コミュニティとの交差—

近年コンパッションあるいはコンパッション都市・コンパッション・コミュニティという言葉が聴く機会が増えている^{viii}。牧野篤もその著書の中でウェルビーイングを「人が幸せを感じられるような状態であること」と記述した上で、コンパッションは「ウェルビーイングの基盤となる感情」であり、この感情の存在が「私たちが社会をつくることになった基本的な原理」と述べる^{ix}。

それではコンパッションとは何か。医療社会学者のケレハーの著書^xに詳しいが、日本における第一人者の竹之内裕文は、「コンパッション」(compassion)とは、「共に苦しむ」こと、すなわち、「ある人の苦しみに立ち会い、それを共に受けとめる/引き受けることを意味する。」それゆえ、コンパッションは「共感(empathy)と具体的な行動(action)から構成される」という^{xi}。

信頼関係のある人と人とのつながり(社会関係資本)を意識的に構築していくことが必要なこの時代において、互いの苦しみに思いを馳せ、そうした共感と思いやりと、それらを原動力とする行動によって人が繋がっていくコミュニティの形成や維持に、生涯学習や社会教育はますます力を発揮していくことが求められているであろう。「みんなの尼崎大学」(兵庫県尼崎市)オープンキャンパスで体験させてもらった「みとりまちプロジェクト」はまさにこれを具現化したプロジェクトであった。このプロジェクトは「看取り(みとり)文化」を醸成し、まちぐるみで「看取り」を行うことを目指しているもので、筆者が参加させてもらったのは、そのまちで「看取り」に実際に関わった方たちのトークセッションとワークショップであった^{xii}。福岡県久留米市で民間ベースで展開されている「じじっか」もまたコンパッション・コミュニティを体現している素敵な取り組みである。じじっかは「血縁のない大家族になる実家」で支え合いの中で「ラッキーループ」を創る場として機能している^{xiii}。

誰かの苦しみや悩みを分かち合い、その苦しみや悩みが喜びや楽しみにそれが変わるとき、それは苦しみを持っていた誰かだけが幸せになるのではなく、

その誰かと共に居た人もまた幸せになるのだと思う。そしてその誰かは常に流動的で、いつ自分が誰かになったとしても安心して過ごせるコミュニティを形成・維持する力が生涯学習・社会教育にあると信じている。

注

-
- ⁱ 例えば、下記の資料等を参照のこと。
内田 由紀子、ジェルミー・ラプリー「教育政策におけるウェルビーイング」
<https://www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/000177757.pdf>
- ⁱⁱ 例えば、下記の資料等を参照のこと。
内閣府「満足度・生活の質に関する調査」
<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/manzoku/>
石川智久（2024）「Well-being と Beyond GDP—世界の議論は「脱成長」では無く、「成長と社会課題解決の両立」—」日本総研
<https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/viewpoint/pdf/15032.pdf>
- ⁱⁱⁱ 横山直、有野芹菜、門野愛（2024）「Well-being “beyond GDP” を巡る国際的な議論の動向と日本の取組」内閣府。
- ^{iv} OECD の幸福度に関する HP を参照のこと
<https://www.oecdbetterlifeindex.org/>
- ^v Smart City Institute の HP でも同様の指標で把握することができるが、異なる傾向が示されることから、統計的に有意なデータの収集方法についてはまだ改善の余地があるであろう。
- ^{vi} OECD 教育研究革新センター（2008）『学習の社会的成果-健康、市民・社会的関与と社会関係資本』、明石書店を参考に筆者が作成。
- ^{vii} ユネスコ学習都市の HP を参照のこと。
<https://www.uil.unesco.org/en/learning-cities>
文部科学省のこちらの URL でも紹介している。
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gnlc/1367840.htm
- ^{viii} 私自身は、本学大学院で学ぶ加芝洋二から最初にその概念を教えてもらった。彼は福祉分野でのキャリアが長く、福祉と社会教育の知見を融合することで地域ベースでのウェルビーイング創出の新たなモデルを定立しようとしている。
- ^{ix} 牧野篤（2024）『「ちいさな社会」を愉しく生きる—広い世界から、深い宇宙へ』、さくら社。
- ^x アラン・ケラハー著、竹之内裕文・堀田聡子監訳（2022）『コンパッション都市 公衆衛生と終末期ケアの融合』、慶應義塾大学出版会。
- ^{xi} 竹之内裕文（2024）「コンパッション都市の基礎理論：成熟した人間的共感としてのコンパッション」静岡哲学会。
- ^{xii} <https://amanism.jp/ucma/report/entry-356.html> を参照のこと。
- ^{xiii} 紹介はこちらの HP より
<https://kurume-kan.com/dantai/%E3%81%98%E3%81%98%E3%81%A3%E3%81%8B/>
じじっかの HP はこちら <https://umau-llc.localinfo.jp/>

* 本研究は JSPS 科研費 22K02272 の助成を受けたものです。

Ⅲ 実践報告

①次世代を担う青少年のために

安芸太田町教育委員会 教育課

1 はじめに

安芸太田町では、令和6年7月に第2期安芸太田町教育大綱「みんなでつくり育てる教育の未来」を策定し、主体性や独創性を培う教育へと大きく変わろうとする流れの中、予測困難な時代を常識や前提にとらわれず、次世代を担う青少年のため、「安芸太田町らしい学び」の確立及びウェルビーイングの向上を目指しています。

2 安芸太田町版地域学校協働活動「愛ネットワーク安芸太田」

「愛ネットワーク安芸太田」は、青少年の健やかな成長を願い、青少年を取り巻く環境、課題そして具体的な実践等について、学校、家庭、地域団体等に行政や警察等が加わり、連携した取り組みを進めるため、町村合併前の青少年育成加計町民会議の呼び掛けによって結成され、現在は、青少年育成安芸太田町民会議を中心に活動を継承しています。



愛ネットワーク安芸太田 会議の様子

この組織が結成された平成13年頃の時代背景として、社会全体の規範意識の低下に伴う地域や家庭の教育力の低下、子どもが被害者となる事件や犯罪に関わる事件も増加するなどの急激な社会環境の変化に対し、「地域の子もたちを地域でいかに守っていくか」という命題に呼応するものでした。

3 地域学校協働活動の現状

地域学校協働活動としては、あいさつ運動、登下校の見守り、郷土学習、社会奉仕体験、自然体験、職場体験のほか、小学生を対象とした放課後子ども教室、中学2年生を対象とした立志式など地域と学校が協働して、地域全体で青少年の成長を支え、地域を創生する取り組みを継続的に実践していますが、近年の「人生100年時代」、「Society5.0の到来」、「DXの急速な進展」などの新たな流れを受けて、青少年が抱えるいじめ、不登校、貧困や薬物依存など

の悩みも一層複雑化、多様化する中、地域の担い手も高齢化や固定化によって、後継者の育成などの課題も顕在化するなど、新たな局面を迎えています。

4 「愛ネットワーク安芸太田」のこれから

「愛ネットワーク安芸太田」は、毎年2回、会議を開催し、社会動向を踏まえたテーマに応じて、各種団体等が活動報告や意見交換を行い、課題を共有する機会を設けるだけでなく、あいさつ運動の普及啓発など先導的に実行する力もあり、安芸太田町における青少年のウェルビーイングの実現に向けて、これからも中核的な役割を担う組織です。

地域全体で青少年の成長を支え、地域の一人一人が幸せを実感できる「人づくり・つながりづくり・地域づくり」を实践できる組織として、新たな共生社会に向けて、本町教育大綱を普遍的な使命としつつ、新たな時代の要請を取り入れることを基調とし、安芸太田町らしい新たな取り組みを展開したいと考えています。

②呉市における社会教育委員の役割と取組

呉市文化スポーツ部文化振興課

本市は、令和３年３月に策定した第５次呉市長期総合計画において、「誰もが住み続けたい、行ってみたい、人を惹きつけるまち「くれ」を将来都市像に掲げ、「文化芸術やスポーツに親しみ、生涯を通じて学ぶことができるまち」を目指すべき姿とし、基本政策のひとつとして「生涯学習の推進」に取り組んでいます。

現在は、価値観や働き方の多様化をはじめ、変化する社会情勢等に対応する学習ニーズも多様化、細分化しています。市民一人ひとりが生涯にわたり心豊かで生き生きと生活することができるよう、地域コミュニティや家庭を取り巻く環境の変化に対応する学習ニーズに対応するため、「生涯にわたる学びの支援と社会教育の振興」の実現を進めています。

呉市社会教育委員会議

本市の社会教育委員は、学校教育関係者、各種団体の代表者及び学識経験者の専門家の１６名で構成され、地域住民の声を聴いていただき、行政に対して地域の課題を伝えるとともに意見をいただいています。社会教育委員会議は年１回開催し、社会教育関係団体への補助事業や、はたちの集い等に関する内容をはじめ、それぞれの立場で集められた地域住民の声のほか、社会教育施設の利用など様々な意見等をいただいております、それらを市の施策等へ反映するよう努めています。

また、国・県が主催する社会教育委員への研修機会を活用して、委員を派遣し、資質の向上にも努めています。

次世代を担う青少年の育成

社会教育委員が関わる団体の活動の中で特筆すべきは、「呉子ども祭」です。

毎年５月４日、呉ポートピアパークを会場に開催される「呉子ども祭」は、ス

ステージ発表や体験コーナーなどがある子ども向けのイベントで、現在は、呉市内の高校生が集まって大会テーマを決め、どんな内容にするか、およそ半年かけて企画し、準備を行っています。

もともとは、子ども会、呉市、青年会議所が協力して始まった子ども祭ですが、運営者や参加者の減少に伴い、次世代を担う高校生の力を生かそうと、社会教育委員でもある呉市子ども会連合会長が市内の高校に呼びかけ、今の運営形態ができあがりました。参加する高校や生徒の数も年々増加し、小さな子どもたちと関わったり、企画から運営まで皆で協力して一つのイベントを創り上げるという経験が高校生の大きな成長の場として認知されると共に、親子連れをはじめとする参加者にも大変親しまれています。

令和6年5月4日も、「えがおの花み一つけた！」をテーマに開催され、高校生たちの手作りのポスターや横断幕が飾られ、ステージ発表や体験ブースなど多くの催しが繰り広げられました。



(呉子ども祭り運営の高校生)



(呉子ども祭りの様子)

社会教育委員への期待

社会教育委員には、地域の実情に敏感になっていただき、地域の施設や社会教育事業等を通して、引き続き住民の声を聴いていただきたいと思います。

また、それぞれの立場で、様々な活動を通して「ウェルビーイング」の実現に向け、力を発揮していただければと思います。

一方で、横のつながりがあるようでないという状況も見受けられるため、今後はネットワークをより広げるとともに、情報交換できる場を増やしていきたいと考えています。

③「地域の手づくり芸術祭せらポン！」の取組

世羅町教育委員会社会教育課

1 はじめに

世羅町では、中学生・高校生から大人まで、幅広い世代が交流し相互理解を深めるとともに、文化ホールを活用した事業を地域住民が主体的に企画立案し実施する、「地域の手づくり芸術祭せらポン！」に取り組んでいます。

この事業名の由来は、多くの人が楽しめるイベントを実施することで、せらの町が元気になって気持ちがポンポンと弾む様子を表しています。

2 事業のきっかけ

この事業は、広島県の「文化芸術に係る地域住民参画型モデル事業」をきっかけに始まりました。

中学生や高校生に、自分たちも文化ホールを利用できる立場であることを知ってもらい、大人では考えもつかないような発想をもって企画してほしいという思いのもとで、文化施設の活用の幅を広げることや文化芸術を通した子供と大人の協働の場づくりをねらい、事業をスタートさせました。

3 事業の概要

本事業は、世羅町の将来を担う中学生・高校生が主体となり、せら文化センターやせらにしタウンセンターのホールを使った事業を考え、その実施にあたっての支援を地域の大人が担う形で取り組んでいます。

令和4年度から5年度までの2年間は広島県の支援を受け、令和6年度は町単独事業として、3年間で4回のイベントを実施してきました。



表1 「地域の手づくり芸術祭せらポン！」実施内容

回	開催日	会場	内容
1	R4. 10. 30	せらにしタウンセンター	町内の伝統芸能をホールで上映し、ホールの新たな活用方法を模索する中で考案されたオリジナルのゲーム大会を実施。
2	R5. 3. 21	せら文化センター 大田自治センター	地元中学生・高校生と有志の住民メンバーがやってみたい企画を立案し実現するイベントを実施。
3	R5. 11. 19	せらにしタウンセンター	地元中高生が立案したユニークな企画を多数盛り込んだイベントを実施。
4	R6. 7. 21	せら文化センター	町単独事業での実施。地元中学生・高校生と有志の住民メンバーが企画を立案し実現するイベントを開催。

4 これまでの成果

これまで3年間で4回の事業を実施してきました。取組の当初は、これまでにない事業のため、手探り状態でのスタートでしたが、中学生・高校生がやってみたいことを引き出し、どうやって実現させるか、参画した全員で相談し、話し合いながら進めてきました。

そのため、中学生・高校生がやってみたい事と、具体的な実施を考えた際の実現可能性面での調整、擦り合せには多くの時間を要しましたが、話し合いを重ね、イベント実施を継続する中でノウハウが蓄積され、主体的・意欲的に参加する姿が見られるまでになりました。

5 今後に向けて

県の事業として実施した2年間では、「文化・芸術」の冠を意識し、いかに文化・芸術要素を実施内容へ盛り込むかに苦心しました。

町単独事業となつてからは、自由度は増したと感じていますが、計画を立案していくうえで、本事業の目指すところについて、大切にしたいものや参加者に何を伝えたいかといった点など、しっかり共有することが重要と考えます。

また、中学生・高校生の参画者は、それぞれ進級・卒業し、参画者は入れ替わっていますが、大人の参画者は一定の人数が維持されています。

この事業を長く継続させるには、中学生・高校生から大人へのつながりを大切にした緩やかな世代交代を確実なものとする必要性を感じています。そのうえで、蓄積された実施ノウハウを引き継ぐことで、将来的には自主運営できる組織へと成長させていきたいと考えています。

④青少年が「主語」となる社会教育の道筋へ

府中市社会教育委員会議議長 岡本由姫美

1 社会教育委員の議論

府中市社会教育委員の会議は、委員の経験知と見聞をもって「意見すること」に価値を置いています。令和6年度の会議及び視察活動で交換した意見を論点整理すると、府中市の社会教育の取組課題は次の2点に収められます。



(令和6年度の視察活動)

1点めは、中高生がこのまちに関わりたくなる生涯学習シーンの少なさ。

2点めは、地域課題の解決につながる学びの場の未形成。

そこで、「だったらどうする議論」に展開していくと独任制の社会教育委員ゆえの多様な意見とアイデアが次のように交差しました。

- ① 多様な市民が参加したくなる学びの場づくり。
- ② 若者や子育て世代の動機にフィットするワークショップやプログラムづくりに市民が加わって、「学び続けるひと」が活躍できる仕掛け。
- ③ 15歳までのコミュニティ・スクールのあと、85年間の拠り所となりうる「人生100年時代」の生涯学習の選択肢。
- ④ 児童生徒も「府中市民」。小中高生のまま生涯学習の学び手・創り手になれるような、学校とは異なる学び環境を公民館にプランニング。

2 対立意見はトランスフォーメーション

会議で対立意見が行き交うことも理想の一つですが、そのような場面が生じた際は、「委員の会議に議長及び副議長各1人を置く」とうたう府中市社会教育委員条例に立ち戻ります。委員個人の意見をリスペクトし、かつ、議論の向かう先を収める「議長」を置く組織機能は、社会教育のフィールドにふさわしいと改めて理解しています。

その点で私は、対立意見こそ変容・飛躍のチャンスとみて、たとえば両者の意見を二等辺三角形の両底角になぞらえて、互いの目線を斜め上方に延長すれば必ず頂角で交じり合える、そのような寛容さと躍動感ある会議を持続できるよう、「めざす目的」を共有するプロセスを大切にしています。

3 若者の躍動を受け止められる社会教育観の変革

社会教育委員の意見を自治体の教育施策に反映させる点では、教育委員会事務局スタッフとの「社会教育観」の共有は、かなり重要と見ています。

そこで、今年の府中学びフェスタに登壇したお笑いコンビ「おしどり大名」の記念講演を紹介します。M1 グランプリに挑み続ける結成7年の若手プロ芸人です。売れっ子で成功者かと言えば未だ無名の域にあって、同期の多くが引退する現実に向きつつも手放せない「挑戦」への思いを語られました。

講師決定にあたっては実行委員会や事務局で相当な意見交換をされたと聞きます。次世代に確実に響き、世界の見え方が変わる体験や希望をどう作るか。成功された方の説得力ある挑戦のみならず、成功しないかもしれない不安も抱く若い挑戦者の肉声を通して、府中市の若者が自ら動き始めることを期待したい。そういったコンセプトを鮮明にして実現されました。

このエピソードは、議論を交わすプロセスで、「社会教育観の変革」というターニングポイントに至った好事例としてフォーカスできます。

私たちはこれまで学校教育・社会教育を問わず小中高生や青少年たちを、教育活動や支援活動の「対象者」として見てこなかったでしょうか。



(おしどり大名の学校訪問)

青少年が、「選ぶ」、「決める」、「働きかける」、このまちに「学びを創る」。

青少年が「主語」となる文法と文脈で社会教育の在り方を語る。そういった価値創造も社会教育委員の会議で議論するにふさわしいと思っています。

4 府中市社会教育委員の活動

青少年が「主語」となる社会教育とは、たとえば若い世代が企画者あるいはプレイヤーになり、多様な市民を学びの愉しさにつなぐ姿のことです。

その結節点に「20歳を祝う会」を置いてみれば、社会教育委員の今後の活動が描き出せるはずです。家庭教育・学校教育を通じてどのような20歳を育てたいのか。また、視界を広げた20歳の選択肢に、「生涯学習を通して住むまちを豊かにしている大人たち」が魅力に見える出会いをどう組み込むか。

私たち府中市社会教育委員は、これらの問いに対する回答を手繰り寄せられるポジションにいることを任務と受け止め、活動したいと思っています。

⑤子どもたちが安心できる居場所づくりと地域連携を目指して

広島市社会教育委員 竹澤 真奈美

1 社会課題と社会教育への期待

近年、少子高齢化や地域連帯の希薄化、不登校生徒の増加など様々な社会課題が取り沙汰されている。それに加え、将来の不確実な時代の変化を踏まえ、文部科学省は、昨年6月の中央教育審議会総会で「地域コミュニティの基盤を支える今後の社会教育の在り方と推進方策について」諮問したが、これは社会教育人材の養成や地域コミュニティを活性化させる狙いがあるとしている。

2 これからの子どもたちに必要とされる力

本市においても、コロナ禍を経てこれら社会課題はより顕著である。とりわけ子どもたちには、「誰一人取り残さない教育」はもとより、子ども時代に礎となる「地域や他者との交流」や「自主的に考え挑戦し失敗する経験」は必要不可欠であり、それらの経験がなければ、「社会に出た時に発想力や創造力は生まれない」と言われている。

私は、PTAや学校ボランティア等の活動を通じ、折に触れて子どもたちから直接話を聞く機会があった。中には、「授業でわからないところを教えてもらえる場所がない」、「学校に行きにくい」、「放課後や長期休暇中、保護者が帰宅する19時頃までYouTubeを観たりゲームをしたりして家で待っている」など、不安を抱えた子どもたちをサポートする「居場所」がない現状を目の当たりにした。

そこで私は、社会教育委員や公民館職員、PTA会長など様々な立場で得た知見を活かし、学習支援と子どもたちの居場所づくりを目的に、中高生主体で企画運営する公民館事業「楽集（がくしゅう）レクリエーションルーム『ふわのき』」を立ち上げた。事業の柱は、学習支援とレクリエーションの2本であり、本事業は、「年の近い参加者同士の相互理解により安心感が生まれ、自分らしく楽しく過ごせる場ができる」「幅広い世代との交流や体験を促進できる」「やりたいことに挑戦し計画・失敗・改善・成功を繰り返し、非認知能力や自己肯定感、自己効力感を伸ばせる」など、様々な高いポテンシャルを持っている。「年が近い」からこそ低年齢の子どもでも心を開きやすいことは、意図した戦略的重要要素であり、何

度も顔を合わせることで親近感を抱くことは、ナッジの効果を密かに意識している点でもある。参加者からは、「同世代や他世代とつながることが楽しい」「学校には行けないけどここには来たい」「学習習慣がついた」などの声が寄せられ、安心できる居場所が着実に作られていると実感している。さらに、本事業が地域に定着し、地域への愛着が育まれれば、転出超過も防げるのではないかと考える。

3 社会教育委員の役割

社会教育委員は、地域課題解決や学校教育の充実などをつなぐ「地域コーディネーター」とされる。「つなぐ」立場から、どのような「まちづくり」をしたいかという未来予想図を描いて地域団体や人材、学校、行政などと積極的に関わり、全体を俯瞰してそれぞれのニーズを把握し、情報交換や連携・協働することで、地域住民が生きがいを感じ、幸せで心豊かな人生を送れることに貢献することが肝要であると考えます。



学習支援



レクリエーション

(高校生講師のスライムづくり)



ちらし



レクリエーション (むかし遊び講師：地域の老人クラブ、道具貸出：小学校)

(保護者も童心に帰り、子どもから保護者、高齢者まで幅広い世代が楽しんだ)



Ⅳ 令和6年度広島県社会教育委員研修会報告

【研修会概要】

- 1 趣 旨 広島県の社会教育の振興充実に向け、広島県内の社会教育委員が一堂に会し、研修の場を共有することによって、相互の連携を深める。
- 2 テーマ ウェルビーイングの実現と社会教育委員の役割
～次世代を担う青少年の育成を通して～
- 3 主 催 広島県社会教育委員連絡協議会
- 4 共 催 広島県教育委員会、呉市教育委員会
- 5 日 時 令和6年6月5日（水）12:15～16:00
- 6 会 場 呉市役所（呉市中央四丁目1-6）
- 7 対 象 広島県及び市町の社会教育委員、広島県教育委員会事務局及び市町教育委員会事務局（市町担当課等）の社会教育担当職員
- 8 日 程

時 間	内 容	来賓・講師等
12:15 13:00	〔開会行事・表彰式〕 ・主催者挨拶 ・歓迎の言葉 ・表彰	広島県社会教育委員連絡協議会 会 長 林 孝 広島県教育委員会事務局 乳幼児教育・生涯学習担当部長 (兼)参与 重森 栄理 呉市教育委員会 教育長 寺本 有伸 広島県社会教育委員連絡協議会表彰
13:00 14:00	〔講演〕 複雑かつ困難な社会課題の解決や 持続的な社会の発展に向けて ーイノベーションを担う人材育成ー	〔講師〕 広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 杉原 満治
	(休憩)	
14:10 15:55	〔トークセッション・協議〕 青少年の健全育成に向けた 社会教育委員としての役割	〔登壇者〕 呉市社会教育委員会 副議長 土本 敏明 広島市戸坂公民館 館長 熱田 有紀 NPO法人おのみち寺子屋 理事長 柿本 和彦 広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 杉原 満治 〔コーディネーター〕 一般社団法人まなびのみなと 代表理事 取釜 宏行
15:55 16:00	アンケート記入・事務連絡	

9 内 容

(1) 講 演 演 題：複雑かつ困難な社会課題の解決や持続的な社会の発展に向けて
—イノベーションを担う人材育成—

講 師：広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 杉原 満治

〇はじめに

私は長年、中学校教師として勤務し、定年と同時に
ご縁があり広島大学にお世話になっている。現在は
教職大学院で院生の指導や、教育学部の学生に教職
入門の授業を担当している。学生を見ていると、本当
に真面目だと感じる。私自身の学生時代を振り返る
と、最近の学生は本当によく勉強していると思う。

さて、本日のテーマは「複雑かつ困難な社会課題の
解決や持続的な社会の発展に向けて」という非常に
大きなものであるが、まとめて話すのはなかなか難
しいテーマである。



現代社会は、複雑で困難な課題を数多く抱えている。学校現場でも、子供たちに過剰なプレッシャーをかけているのではないかと感じることもある。不登校やいじめの問題、自ら命を絶つ子供たちも後を絶たない。一昨年、県教委にいた時にふと思ったことがある。「この先世の中がどう変わるか分からない、今ある仕事の半分以上がなくなるかもしれない。」というようなことばかり子供たちに話し、ただ子供たちに「頑張れ」としか言えない現状にもどかしさを感じていた。

私自身も子供たちに何か具体的なアドバイスができるわけではない。昔と今の子供たちを比べると、根本的な部分は変わっていないと思う。しかし、パソコンやスマホの普及など、社会の変化は子供たちに大きな影響を与えている。そんな子供たちに対して、私たち大人に何ができるのか。今日は、学校現場で取り組んできた、地域を挙げて子供たちを育てる取組の事例を御紹介しながら、皆様と一緒に考えていきたいと思う。

先日、私が住んでいる府中市が「消滅可能性自治体」という報道を目にした。確かに人口減少は深刻だが、このようなデータを見て、ただ不安になるのではなく、何かできることはないかと考えさせられた。

折角お集まりいただいているので、皆様にスマートフォンを使ったアンケートをしたいと思う。「あなたの年代は」という質問を持ってきたので回答してほしい。結果を見ると、50代の方が一番多い。私の固定観念ではあるが、社会教育委員の方は経験の長い方が多いというふうに思っていた。しかし、年齢的にバランスが取れていると思って見させていた

だいている。
このように、技術はどんどん進化している。子供たちはこのようなツールを使いこなしている。私たち大人も、新しい技術を学び、子供たちと共に未来を創造していく必要があると感じている。

〇テーマについて

今回の講演テーマは「複雑かつ困難な社会課題の解決と持続的な社会の発展に向けて」というもので、非常に大きなテーマである。



まず、現代の子供たちが生きる未来において、どんな力が求められるのかを皆様と一緒に考えてみたい。折角なので、3分程度時間をとるので、グループで話し合ってみてほしい。そして、グループの中で、スマホが得意な方は打ち込んでみてほしい。

「コミュニケーション力」が一番出てきている。それから「学ぶ力」。「学力」ではなく「学ぶ力」。「創造力」「想像力」が挙げられている。

AI が台頭する現代において、単純な知識やスキルは価値が薄れていく。変化の激しい社会で生き抜くためには、人間関係を築く力や、変化に立ち向かう力が重要になるだろう。

近年、「イノベーション」という言葉が頻繁に使われる。イノベーションとは、革新的な技術や発想によって、新たな価値を生み出し、社会に大きな変化をもたらす取組のことである。イノベーションは、日本の経済を支える上で非常に重要な力であると言われている。しかし、単に新しい技術を生み出すだけでなく、人間性も必要である。

AI の ChatGPT に「イノベーションに必要な力」について質問したところ、「STEAM 教育」や「リーダーシップ」、「実践的な経験」などが挙げられた。

現代社会は、少子高齢化、人口減少、経済の先行き不安など、様々な課題を抱えている。また、世界では紛争が絶えない。ウクライナとロシアの戦争は長期化し、台湾問題や北朝鮮問題など、日本も無関係ではない。このような不安定な社会で、子供たちは日々生きている。私たち大人は、子供たちが未来を生き抜くために、必要な力を育む必要がある。

○生成 AI

AI、特に生成 AI は、大量のデータから新しいものを生み出す点が従来のものとは異なる。画像生成 AI を例に挙げると、日本らしい風景の中に着物姿の女性が桜吹雪の中を歩くような画像を生成できる。しかし、このような AI の進化は、情報の真偽を見極める能力の重要性を増大させる。最近の詐欺メールは巧妙で、一見すると本物と区別が付きにくいものもある。また、著作権侵害や情報漏洩、なりすまし詐欺などの問題も深刻化している。AI は感情、創造性、直感といった人間的な感性や倫理的な判断が苦手である。そのため、AI 時代を生きる子供たちには、人間ならではの力を身に付けさせることが重要になる。私たち大人は、子供たちが AI と共存する社会で生き抜くために、どのような力を身に付けさせるべきかを考える必要がある。

○地域と学校の取組

本日いただいたテーマについて私がお話できるのはこの程度である。ここからは、もう少し身近なところで我々は、子供たちとどう繋がっていけばいいのかという話をさせていただこうと思う。

まず、平成 28 年の文部科学省の中央教育審議会の答申についてお話する。これは、今の学習指導要領が改正される直前に出されたもので、より良い社会を作るために、地域と教育課程を通じて目標を社会と共有しよう、そして、学力だけでなく、資質・能力を育てていこう、ということが書かれている。この答申を受けて、学習指導要領の前文にも同じ内容が書かれ、「社会に開かれた教育課程」という言葉も使われるようになった。

では、これを実際に学校や地域でどう実現すればいいのか。

一つ目の仕組みとして、「コミュニティ・スクール」がある。広島県の県立学校は全てコミュニティ・スクールになり、市町の小中学校でも増えている。コミュニティ・スクールには「学校運営協議会」という組織があり、保護者や地域の方が一定の権限を持って学校運営に参画する。多くの場合、4 月の初めに校長が今年度の学校経営方針を説明し、それに対して委員の方々が議論し、最終的に OK を出す、という仕組みである。ただ、学校が一

生懸命説明しても、あまり意見が出ないまま終わってしまうこともあるようだ。もし皆さんが委員になった際には、ぜひ積極的に意見を出していただきたいと思っている。

もう一つは、「地域学校協働本部」という組織である。これは、学校運営協議会と連携して、地域と学校が一体となって教育活動を進めていくためのものである。

○府中市での取組

私は平成 29 年から 3 年間、府中市立府中明郷学園の校長を務めていた。この学校は、私が教員として最初に赴任した中学校と、近隣の小中学校が統合してできた学校である。私が校長として赴任した当時は、生徒数が減少し、1 学年 1 クラスしかなかった。私が初任のころは、全国的に中学校が荒れている時代で、元気な子供たちがたくさんいた。ところが何十年かぶりに帰ってくると、よく言うことを聞くいい子供たちがたくさんいる学校になっていた。

赴任時、学校には既にコミュニティ・スクールの仕組みがあり、地域と学校が連携した運営が行われていた。「地域の中に学校を、学校の中に地域を」というスローガンの下、地域住民が学校運営協議会の委員となり、学校運営に参画していた。当初は町内会長など、いわゆる充て職の方々が委員を務めていたが、私は様々な層の方々に委員になっていただきたいと考え、委員の構成を大幅に変えた。その結果、会社員、経営者、主婦、農業従事者など、様々な立場の方が委員となり、年齢層も幅広くなった。

コミュニティ・スクールは平成 26 年度からスタートし、私が赴任した 29 年度には義務教育学校として新たなスタートを切った。義務教育学校は、小学校と中学校を一体化し、9 年間の義務教育を行う学校である。府中明郷学園は、中国地方で最初にできた義務教育学校である。

先日、久しぶりに訪問したところ、副会長さんがお 2 人、40 代の人が変わっていた。1 人は教え子で、もう 1 人は教え子の奥さんだった。ちなみに、会長は教え子の父である。

○尾道市での出来事

私が最初に校長をやらせていただいたのは、尾道市の原田中学校という学校だった。ここでの経験が、私の取組のベースになっている。全校生徒 11 名という小規模な学校だが、地域との繋がりが非常に強い学校だった。

私が赴任する前から、子供たちは、腐葉土を製造販売する模擬会社を運営し、地域住民が株主となる取組を行っていた。株主総会では、子供たちが会社の経営状況を説明し、株主からの質問に答えるなど、実践的な経済活動を学んでいた。

また、地域のお祭り「鉦太鼓踊り」では、地域住民が先生となり、子供たちに伝統を教えていた。地域の人々は「先生が辞めても、地域のお祭りは無くない」と話していた。

地域の人々が主体的に子供たちを育てる姿勢に、私は感銘を受けた。地域と学校が一体となって子供たちを育てることの大切さを、私は原田中学校で学び、この経験が、後の府中明郷学園での教育活動の基礎となった。



○地域協創カリキュラム

子供たちは本当におとなしくていい子たちだが、このままでは 20 年後が心配だという思いがあった。そこで、自分たちで問題を見つけ、課題に挑戦できる子供たちを育てたいと考え、「府中明郷グローバル人材育成カリキュラム」という新しいカリキュラムを開発した。このカリキュラムには、グローバルコミュニケーション（英語）と地域協創の二つの

柱がある。

1年生から9年生までいるので、地域のことを成長とともに視野を広げていくようなカリキュラムを先生たちと一緒に作った。1、2年生は身近な地域の不思議を発見し、3、4年生では「怒の心」や命の大切さを学ぶ。そして、5、6年生で農業や地域の製造業について学びながら、中学1年生で自分たちの会社を立ち上げる。

職場体験は中学2年生で行うのが一般的だが、このカリキュラムでは中学1年生で職場体験に行き、自分たちの会社のためになる情報を学んでくるようにした。子供たちは意欲的に職場体験に参加し、商品開発や販売を行う。そして、9年生で活動をまとめる。

会社設立にあたっては、企業の役割について学んだ。企業は単に物を作って売だけでなく、社会の役に立つことが重要だということを学んだ。そして、自分たちで経営理念を考え、「お客様、社員の笑顔と幸せを大切に、府中市の魅力を生かした町おこしをすることで、自分たちの将来に役立させる」という経営理念を掲げた。会社名は「Crale」。「クラフト」と「スマイル」、そして「暮らし」を合わせた言葉である。設立式では、学校運営協議会の会長さんにお話をいただき、私たち教員は参与として会社に関わるが、表には出ない。子供たちが社長など、すべての役割を担う。

設立式の数日後、西日本豪雨災害が発生した。学校は床上浸水し、校舎も体育館も泥だらけ。通学路も寸断され、夏休み明けまで学校に通えなくなった。しかし、地域の方々の協力もあり、8月後半には職場体験（キャリア・スタート・ウィーク）を実施することができた。

職場体験では、マーケティングを学んだり、会社のCMを作ったりした。そして自分たちの製品・商品の開発を始めた。地域の経営者の方々に来ていただき、商品に対する厳しい意見をもらいながら、子供たちは試行錯誤を重ねた。

そして、五つの商品が完成した。「クラボード」という商品には、豪雨災害で流されたケヤキの木が使われている。それぞれの製品には、府中市の木工技術や府中味噌の酵母などが生かされている。完成した商品は、コミュニティ・スクールの全国大会や文化祭で販売したり、クラウドファンディングを行ったりした。修学旅行先の東京にある広島県のアンテナショップ「TAU」と府中市のアンテナショップ「NEKI」でも販売し、多くの商品を売ることができた。

最終的に9年生で卒業論文にまとめる。このような取組を通して、情報活用力やコミュニケーション力、論理的思考力などが身に付いた。県のデータと比較しても、府中明郷学園の子供たちの能力は県平均を上回る結果が出ている。



この取組は、地域とカリキュラムを通して、「未来を創る力をつける」ことを目指した。郷土愛や地元根づいた人材育成を重視し、地元に住むかどうかにはこだわらず、地元との繋がりを大切にできる人材を育てたいと考えた。

この取組は、コミュニティ・スクールの仕組みがなければ成り立たなかった。地域経営者による支援グループの存在も大きい。地域の方々の力を教育課程に生かすことで、子供たちの学びは大きく広がった。

○地域とともにある学校

府中明郷学園には、地域学校協働本部はないが、学校運営協議会の各部が地域とのパイプ役を担っている。学習支援部では、地域協創カリキュラムなどの教育活動に地域の皆さんに入っただき、安全環境部では登下校の見守りや環境整備を行っている。そして、地域活動部では、子供たちが地域活動に参加するだけでなく、主体的に参画できるようコーディネートしている。

以前、地域の夏祭りなどの行事について、町内会長さんから「子供たちが大きくなると来なくなる」という悩みを聞いた。そこで、学校運営協議会の委員と児童生徒の代表者で話し合った結果、子供たちからは「面白くないから行かない」という率直な意見が出た。そこで、「自分たちに何か任せてくれたら面白い」という声が挙がり、小学6年生の女の子たちが主体的に盆踊りのゲームコーナーを企画し、町内会の会議で提案した。

学校は一切タッチせず、子供たちは自分たちで企画書を作り、地域の家々を回って不用品を集めて景品にするなど、工夫を凝らした。当日は、子供たちが運営するゲームコーナーは大盛況で、地域の方々も大喜びだった。

この活動をきっかけに、他の町内会でも子供たちがダンスを披露したり、自分たちで企画した活動を行ったりするようになった。すると、町内会長さんたちから「子供たちがよく頑張っていた」という話を聞くようになり、地域と学校の連携が深まってきた。

地域とともにある学校とは、どんな学校だろうか。私は、地域のおばちゃんたちの姿に感銘を受けた。彼女たちは、見返りを求めずに、自分にできることを考え、学校のために、子供たちのためにと様々な活動をしてくださっている。

例えば、学校の玄関を季節ごとに飾り付けたり、昔話部で絵本の読み聞かせや伝統的な食べ物を紹介したり、田植えや和紙作りなどの体験学習をサポートしたりしている。彼女たちの姿勢は、学校と地域が一体となって子供たちを育てていく上で、大切なことを教えてくれる。

今日は、地域とともにある学校づくりにおけるコーディネーターの役割の大切さについてお話しした。ぜひ、皆さんの地域でも、コーディネーターを中心に、学校と地域が連携し、子供たちが主体的に活動できる環境を作ってほしい。

（２）トークセッション・協議

テーマ：青少年の健全育成に向けた社会教育委員としての役割

登壇者

呉市社会教育委員会議

広島市戸坂公民館

NPO法人おのみち寺子屋

広島大学大学院人間社会科学研究科

コーディネーター

一般社団法人まなびのみなと

副議長 土本 敏明

館長 熱田 有紀

理事長 柿本 和彦

准教授 杉原 満治

代表理事 取釜 宏行

取釜：ここからの時間では、「青少年の健全育成に向けた、社会教育委員としての役割」をテーマに、20年後の社会を見据えた取組に視点を当てて、御登壇の皆様から提供していただいた情報を元に、情報交換を深めていきたいと思う。後半の協議では各テーブルの社会教育委員の皆様で各市町の状況等を踏まえながら御協議いただけたらと思う。まずは、自己紹介と話題提供で進めていきたいと思う。土本さんから。

土本：私は呉市社会教育委員会の副議長をやっている。

ボーイスカウト活動のお世話もさせていただいている。このボーイスカウトの活動で学んだ教えを基本にして、地域の防災防犯などの地域活動にも尽力している。平



成 23 年より呉市第 5 地区自治会連合会内にある明立小学校区、荘山田小学校区、それぞれの学校区内の、子供から高齢者まで一体となった合同防災訓練を企画、運営している。平成 29 年度以降は園児、小学校低学年の訓練指導は、中学生に任せている。園児も小学校低学年も年齢の近い、お兄さんお姉さんと一緒に楽しく訓練を受けているようだ。学校の授業だけではできない実地体験が、地域の方と一緒にできることにより、防災及び減災に対する意欲が湧いてきたようで、いきいきと活動している様子がわかる。



取釜：中学生が幼稚園児を指導したり、小学生が高齢者を指導したりして、ともに育つというのが一つのキーワードになっていた。続いて、熱田さん。

熱田：私は、平成元年度に広島市青少年センターに採用され、その後、公民館等を経て、平成 26 年度に再び青少年センターに出戻っている。

コロナ禍を中央公民館で過ごしたが、その時に広島市公民館職員とともに、リモートを活用した新しい公民館事業にチャレンジするリモート公民館ひろしま、通称リモコひろしまという研究チームを立ち上げた。現在、このリモコひろしまで繋がった縁で、全国の公民館職員とともにネットワークを組んでオンライン研修会などを実施している。

現在勤務している戸坂公民館があるのは学校が多い地域で、比較的若い世代の多いところになっている。しかし、公民館の認知度は低く、危機感を持ち、小学生を対象にした事業をたくさん実施した。小学生を対象にした事業を拡充することにより、少しずつ申込みとか参加者も増えてきている。

他にも、中学生や高校生、大学生が自分たちでアイデアを出して企画をしたり、やってみたいと思うことにチャレンジしたりする機会を提供した。参加者には好評で、大変喜ばれている。

公民館であの手この手といろいろチャレンジしているところではあるが、住民の一番近くにある公共施設の公民館は、そもそも青少年にはあまり認識されていない。そしてそもそも何をするとところかも、何をしたら良いかも。何ができるのかもわからない。公民館をこれからどのように青少年にアプローチするのかが、現在の私たちの課題かなというふうに考えている。

今日、皆様に意見をお聞かせいただいて参考にさせていただきたいと思う。

取釜：続いて、柿本さん。

柿本：NP0 おのみち寺子屋の理事長をしている。当団体では、人間力育成塾を中心に、青少年健全育成、生涯学習、市民参加のひとづくり、地域コミュニティ活性化を目指した活動をしている。年間を通して様々な事業を行っているが、メインは夏に行われる「おのみち 100km 徒歩の旅」である。小学 4 年生から 6 年生までの 100 名が、4 泊 5 日かけて尾道市内 100km 歩くというもので、今年で 22 回目を迎える。

この活動を通して、子供たちには感謝の念を育み、郷土への愛着や誇りを感じてもらいたいと考えている。また、中学生はボランティア研修生として、高校生は大学生と共に活動をサポートする。学生スタッフは、5 月から 8 月にかけて毎週日曜日に研修を行い、本番に向けて準備を進める。社会人スタッフは、黒子として学生スタッフの育成に徹している。

冬休みと春休みには、「寺子屋おのみち」と題して、学習支援や普段できないような体験学習を行っている。10 メートルの巻き寿司を作ったり、藻塩を作って羽釜でご飯を炊いておにぎりを握ったり、自己肯定感を育めるようなプログラムを用意している。

地域との連携も大切にしており、石見銀山から尾道までの銀の道を地域の方と一緒に

に整備したり、地域のお祭りに参画・協力したりしている。

子供たちには、100km 歩くという挑戦を通して、人との関わりの素晴らしさや達成感を感じてもらいたいと思っている。中学生や高校生には、キャリア教育の一環として、職業観や勤労感を育んでももらいたいと考えている。

今後は、小中学生、高校生を中心としたまちづくりに貢献できるよう、新たな計画を立てていきたいと考えている。



取釜：ここまでお三方は、いわゆる社会教育のど真ん中で、それぞれの立場の中で、格闘してきたことを共有していただけたと思う。続いて、杉原先生にお話しいただくが、取組自体は先ほど皆さんにじっくり共有していただいたので、ここではその取組の中で、どの辺りが難しかったのかということを中心に話題提供していただけたらと思う。

杉原：お三方の取組を聞かせていただきながら、よく「地域の人は土の人、我々教員は風の人」と言われるが、本当に地に足のついた取組をされていて、私自身の土にあたる、私自身の地域で何もしてないなということを反省しながら、聞かせていただいていた。

私はこれまで、学校教員として「風の人」として、地域と学校を繋ぐ役割を担ってきた。その中で、人材育成はもちろんのこと、人間形成こそが重要だと感じている。しかし、地域との繋がりを深めるには、コーディネーターの存在が不可欠である。

私自身、校長時代には地域の様々な方と積極的に交流し、学校と地域を繋ぐパイプ役を務めてきた。例えば、尾道市の美木中学校では、地元のレモンイカ天を作っている会社を紹介してほしいという思いから、食品会社の社長に直接電話をしたこともあった。地域の方と繋がることは、私自身も楽しんで取り組んでいた。

しかし、地域との繋がり方には、注意すべき点もあると感じている。以前、ある小学校の先生から「ありがとうの会」という取組についてお話を伺った。それは、1年間お世話になった地域の方々を学校に招き、児童たちが感謝の気持ちを伝えるというものだった。素晴らしい取組だとは思ったが、一方で、コンビニの店員さんとお客さんのような、形式的なものになっているのではないかという懸念もあった。本当に大切なのは、顔と顔を合わせて、共に学び、感動を分かち合う中で、自然と感謝の気持ちが生まれることではないだろうか。

地域の方々との繋がりを深めるためには、コーディネーターの役割が重要である。どのような形であれ、お互いを尊重し、高め合える関係性を築くことが大切だと考えている。

私自身、今は学校の管理職ではないが、「土の人」として地域に関わっていききたいと考えている。地域の一員として、地域を盛り上げ、未来を担う子供たちを育てていくために、私にできることを探していきたいと思っている。

取釜：繋がり方で、難しい部分があるという話だった。ぜひ3名の方に、社会教育側から、子供たちや学生と連携する中で、この辺が難しかった、このように乗り越えたという話をお伺いできたらと思う。

土本：呉市では平成22年に各地域でまちづくり委員会を発足した。自治会や幼稚園、小中学校の校長もメンバーに加わり、毎月第2火曜日に様々な話し合いを行っている。その結果、幼稚園や学校と連携した防災訓練が可能になった。また、学校行事における地域住民の協力体制も構築できた。近年ではPTAの方もまちづくり委員会に参加し、地域と学校の連携がさらに深まっている。今後もこのような場を通じて、より良い地域社会の実現を目指したいと考えている。

熱田：コロナ禍でリモート事業を始めたが、新しいことをやろうとすると、組織や前例といった大人の事情で「はて？」と思うことが多かった。例えば、「広島を好きになる講

座」を企画した学生が通う大学では、当時 Zoom が使えなかった。Zoom ではなく Teams を使ってくれ、とのことだった。公民館との打合せは Teams で行い、大学生には実際に公民館に来てもらって事業を成立させた。

新しいことをやるときには、いろいろな制限や抵抗勢力があるのだなと痛感した。それでも、やってみれば外から認められるというか、それで私も今ここにいるのではないかなと思っている。とにかく、やってみることが大切だと思う。

何事も 1 人ではできない。私の場合、賛同してくれる公民館の仲間がいたので、みんなで情報共有しながら、とにかくやってみようということで、みんなでできたのがよかった。

柿本：私たちの団体では、実際に活動に参加した子供たちが、中学生になるとボランティア研修生として、高校生になるとスタッフとして戻ってきてくれる、という素晴らしい循環が生まれている。

この制度は、最初からあったわけではない。22 年続く活動の中で、4 回目か 5 回目の頃、活動に参加した中学生から「何か手伝えることはないか」と声がかかったのがきっかけだった。最初は「中学生に責任のあることは任せられない」と断ったが、よく考えてみると、プラカードを持ったり、荷物の搬入を手伝ったりするくらいならできるのではないかと思い、ボランティア研修制度を作った。すると、小学生たちが中学生や高校生の活躍する姿を見て、「自分も中学生になったらボランティア研修生になりたい」と言うようになった。

大人が声をかけるよりも、子供たちが少し年上のお兄さんお姉さんの輝かしい姿を見る方が、はるかに影響力があることが分かった。それから、子供たちが自然に戻ってきてくれるようになり、良い循環が生まれた。

地域で何かをするときは、子供の声やアイデアを吸い上げる仕組みを作ることが大切だと思う。「そんなことはできない」と決めつけずに、まずはやってみることが大切である。私たちのボランティア研修制度も、最初からあったわけではない。子供の声に耳を傾け、試行錯誤を繰り返した結果、今の形になった。

取釜：つなげる時のポイントがあれば教えてほしい。

柿本：ボランティア研修生として参加してくれる中学生が年々増えている。説明会では保護者同伴のもと、小学生のお世話をする上で指示を守れない場合は帰ってもらうことを伝えている。過去には実際に帰した生徒もいる。

プラカードを持つ、荷物を運ぶといった仕事であっても、中学生たちは人のためになっているという誇りを持って取り組んでいる。その姿は小学生からもかっこよく映るだろう。

事前に 3 回の研修を行い、仕事内容をしっかり覚えてもらう。また、仕事にはないが、社会人スタッフが作る夕食のカレーライスなどを手伝いたいという声も毎年上がる。生徒たちの様子を見極めながら、手伝わせるか判断することも大切である。

取釜：私自身は、高校に社会教育側から関わる高校魅力化プロジェクトを 11 年ほどやってきて、全国 100 ヶ所以上に広がっている。卒業して大学生になって帰ってくる子たちが現れてきたが、以前は同級生が 120 人いても島に帰ってくる子は 5 人しかいなかった。人口が減ってしまうので、郷土愛を育めばいいんだという教育をしている地域もあるが、郷土愛を育んでも U ターンに繋がらないという現状がある。U ターンのポイントは何なのかを色々伺いたいと思っている。

杉原先生、今のお話も踏まえて、20 年後の未来に必要な力についてお伺いしたい。

杉原：未来は不確かで、私も 20 年後がどうなっているか分からない。だからこそ、いろいろ



ろなことに臆せず挑戦する力が大切だと思う。

県教委時代に、集団に馴染めない子供たちとスマホなしで家出をする企画をした。マイクロバスで塩町駅まで行き、そこから各自で家まで帰る。普段人に聞くのが苦手な子も、スマホがない状況で必死に帰る方法を考える。塩町駅は電車が数時間に1本しか来ないので、他の手段を考えざるを得ない。

この企画を通して、子供たちは急場をしのぐ力や、目標を達成する力を身につけた。これは大人にも大切な力だと思う。困難な状況を乗り越えるために、挑戦する力、コミュニケーション力、そして何とかして目標を達成する力が必要だと感じている。

取釜：熱田さんにお伺いしたい。公民館が青少年に認識されない、情報網に引っかからないという話があったが、今後、公民館として青少年育成にアプローチできそうな未来があれば教えてほしい。

熱田：今、私が考えているのは、何とかして若者たちに公民館をもっと利用してもらうことだ。

先日、公民館に来る若者たちに話を聞いたところ、一番多かった要望は「勉強できる自習スペースが欲しい」ということだった。そこで、夏休みに公民館の一室を学校の勉強ができる自習室として開放することを計画している。もちろん、ただ開放するだけでは心配なので、地域の方にボランティアとして見守りをお願いしたいと考えている。さらに欲を言えば、学校の先生にも公民館に来ていただけると嬉しい。先生には、子供たちが勉強している様子を見守ってもらったり、編み物ができる方には、編み物をしながら子供たちを見守ってもらったり。地域の方や学校の先生など、様々な立場の人が公民館に集まり、子供たちの希望を汲み取ってくれるような、そんな場を作りたいと思っている。

子供たちが「何かやりたい」と思った時に、それを大人たちがサポートしてくれる。そんな雰囲気地域にできれば、子供たちは地域への愛着が湧き、将来は自分も子供たちのために何かしたいという気持ちが芽生えるかもしれない。このようにして、少しずつ良い循環が生まれるのではないかと考えている。

取釜：おそらく障害になるだろうというものがあったら教えてほしい。

熱田：中学校の校長先生に、学校の先生に来ていただいて、見守り隊やってもらえませんかという話をしたら、校長先生が教育委員会に話をしてくれただんですけども、教育委員会がNGということで、学校の先生を他に派遣することはできないということだった。

取釜：頷いている方もいる。ここ10年で一番変わったのはワークライフバランスだと思っている。先生が外に出て何かすることが難しくなっている。杉原先生に伺いたい。何か学校側からこういうふうにやってもらったら、一緒にできそうだったことがあったら教えてほしい。

杉原：地域で子供たちが様々な活動をしている。それを支えているのは公民館であったりボランティアであったりするわけだが、そうした中で子供たちは様々なことを感じ取っている。中学校の先生が地域活動に加わることも有意義だとは思いますが、先生がいることで子供たちが萎縮してしまう可能性も考慮しなければならない。地域で子供たちが育つということと、そこに先生が入り込んでいくということのバランスを、子供たちにとってどうなのかという視点で考えていく必要がある。ワークライフバランスも重要だが、子供たちの育成という観点からも、この問題については議論が必要だと思う。



取釜：協働すればいいというものでもなく、地域でできること学校でできることも考えて

いくことも大切ではないか。

柿本：学校の先生が直接子供たちを指導することも重要だが、私どもは春休みと冬休みに寺子屋を開き、学習支援を行っている。以前、中学生で学習に課題がある生徒が寺子屋に来ていた。学校ではなかなか勉強に集中できないようだったが、ここでは熱心に勉強していた。ある日、校長先生が寺子屋を覗きに来られ、その生徒が一生懸命勉強している姿を見て、大変驚かされていた。寺子屋では、大学生のスタッフが学習をサポートしている。年齢が近いお兄さんやお姉さんが優しく教えてくれることが、子供たちの学習意欲を高める要因の一つかもしれない。学校の先生とはまた違う、身近な存在である大学生のサポートが、子供たちの成長を後押ししていると感じている。

取釜：地域の課題を解決するには、地域だけでなく、学校など様々な関係機関と連携することが重要である。特に学校と連携する場合は、学校の誰と繋がれば良いかを考えながら、協働で取り組むことが大切である。今回のトークセッションでは、社会教育と学校教育を繋げることの課題や、その解決策のヒントを、最前線で活躍されている方々の経験から共有できたと思う。



V 表彰

1 令和6年度全国社会教育委員連合表彰

一般社団法人全国社会教育委員連合は、社会教育の推進に貢献し、社教連の発展に功績のあった社会教育委員及び関係職員を表彰し、もって社会教育の振興に寄与することを目的にこの表彰を行っています。

本年度は、呉市の社会教育委員として中心的な役割を務め、永年にわたり、広島県社会教育委員連絡協議会理事を務めてこられた原俊三郎氏が受賞されました。ここに、御功績をたたえ、永年にわたる取組に感謝申し上げますとともに、受賞の喜びの声を御紹介します。

「全国社会教育委員連合表彰にあたって」

呉市社会教育委員会議議長 原 俊三郎

令和6年10月24日、第66回全国社会教育研究大会（茨城大会）において、全国社会教育委員連合会長表彰をお受けさせて頂き至極光栄でございます。皆様に厚く感謝申し上げます。

呉市のスポーツ少年団及びスポーツ協会の代表として、地域の子どもから大人まで多くの方と関わって参りました。また、平成21年から社会教育委員となり14年経ちますが、近年、社会教育という言葉があまり使われなくなってきたような気がしております。社会教育委員は地域が抱える問題解決のため、地域の実情を把握し、住民の声に耳を傾け、住民と行政とを結ぶ架け橋となる役割を担っております。そのため、社会教育研究大会等で各地区の取組状況などお聞きする機会は非常に大切な場であると思います。今後も、社会教育委員として地域の社会教育の一助となれるよう取り組んで参りたいと思っております。皆様のご発展とご多幸を心よりお祈りし挨拶とさせていただきます。



2 令和6年度広島県社会教育委員連絡協議会表彰

広島県社会教育委員連絡協議会では、社会教育の推進に貢献し、同協議会の発展に顕著な功績のあった社会教育委員の方を毎年表彰しています。

本年度は、次の4名（3市町）の方々が受賞されました。

ここに、御功績をたたえ、永年にわたる取組に感謝申し上げますとともに、今後ますますの御活躍をお祈りいたします。

（敬称略）



平前 恭子
（福山市）



畑 博志
（三次市）



矢野 好子
（三次市）



松岡 千恵子
（坂町）

3 令和6年度社会教育功労者表彰

社会教育功労者表彰は、地域における社会教育活動を推進するため多年にわたり社会教育の振興に功労のあった者及び全国的見地から多年にわたり社会教育関係の団体活動に精励し社会教育の振興に功労のあった者等に対し、その功績をたたえ文部科学大臣が表彰するものです。

この度、尾道市社会教育委員会議議長として、尾道市の生涯学習・社会教育の発展に大きく貢献した緒方恵理子氏が受賞されました。

ここに、御功績をたたえ、永年にわたる取組に感謝申し上げますとともに、受賞の喜びの声を御紹介します。

「社会教育功労者表彰受賞にあたって」

尾道市社会教育委員会議議長

緒方 恵理子

「一期一会」これは、二十歳の頃に出会った言葉です。

様々な人と出会い、多くの学びを実感し強く心に響く言葉となり、私の座右の銘として共に生きています。

私自身知らない土地で子育てが始まり、その時の不安や孤独感から地域の子育てサロン、尾道市子育てサロン連絡協議会（平成21年～）を立ち上げ、仲間づくり・居場所づくりを目指して多くの人たちと一緒に活動しています。

また、18年間の主任児童委員の活動を通して、子どもの成長に家庭の力、地域の力が大きな影響を与えると実感し、平成20年より体験活動やグループワークを中心とした家庭教育支援チームの活動を続けています。

「保護者と共に！子どもたちと共に！仲間と共に！」これが私の毎日です。この度は、身に余る立派な賞をいただき、驚きとともに感謝の気持ちでいっぱいです。改めて、多くの人たちと繋がっていることに、幸せを感じています。受賞を1つの節目として、これからの活動を次へと進めていきたいと思っています。



VI 大会報告

第 66 回全国社会教育研究大会茨城大会

廿日市市社会教育委員会議議長 川西 哲憲

令和 6 年 10 月 23 日から 25 日まで 3 日間、茨城大会は水戸市で 2 代水戸藩主徳川光圀公に縁のある「彰往考来（過去をあきらかにして未来を考える）～人をつくり人をつなぎ地域をつくる未来の社会教育」を大会スローガンに、全国から千名余りの社会教育関係者が集まり開催されました。

アトラクションでは 9 代水戸藩主徳川斉昭が重んじた「一張一弛」の考えに基づいた「偕楽園記」を地元の小学生が暗唱し、時には休むことの大切さを披露されました。

記念講演では茨城県の出身者の高信幸男氏が「あなたの知らない名字の世界」と題し、名字には地域性や歴史があるという話をされました。

シンポジウムは「子どもたちの成長を支えるためには 社会教育は何ができるか」をテーマに発表があり、一人目は引きこもりがちな若者の就労支援など制度外の福祉支援、外国ルーツの子の学習進学支援、空き家等を活用した多文化保育園と一時支援施設を運営の傍ら外国籍住民らの相談多文化ソーシャルワーカー等の発表でした。誰一人取り残さない取り組みに感動しました。

二人目は「絆づくりは人づくり」をモットーに、地域で子どもたちを育てるための「大洗うみ・まちコミュニティースクール」を目指して学校、家庭、地域の連携強化している発表でした。

三人目はママ友と設立した子育てサロンを運営しながら、「ママを守らなければ子供は守れない」と孤立させない為に、家庭訪問型子育て支援をはじめ外国人ママ支援相談事業等を行いママ達に必要だと思われるイベントを開催する等の発表で、ママ達に寄り添うことの大切さを強く感じました。

私が出席した第二分科会は「家庭教育の教育支援」をテーマに、一人目はお寺に嫁ぎ出産したが子育て中に孤立した経験から自主サークルを立ち上げ、ママ友が出来、子育てが楽しくなっていく中で、子育てに関するプラットフォームが必要と思い、事業を展開し子育ての悩み解消に協力している強い繋がりを感じる発表がありました。

二人目は鹿嶋市で子育ての不安や悩み抱えているが、学校への相談は敷居が高いと思っている保護者に対し、支援員が小学一年生の子供がいる全戸の家庭を訪問して、若い保護者の孤立を防ぎ、不安を解消している活動の発表がありました。

最後のグループ討議では各県の人達とそれぞれの発表の気づきを話し合いました。永遠に続く社会教育の新しい出会いに喜びを感じながら、地元へ帰って少しでも役立て反映できればと思います。

終わりに本大会に出席させていただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



令和6年10月23日～25日に茨城県水戸市で「第66回全国社会教育研究大会 茨城大会」が開催されました。

茨城大会では「彰往考来～人をつくり 人をつなぎ 地域をつくる 未来の社会教育～」をスローガンとし、「誰一人として取り残さない社会を目指す社会教育のあり方～子どもたちの健全な成長を支える～」を研究主題に全国から千名余りの教育関係者が集まり、私もその中の一人として講演・シンポジウム、分科会に参加させて頂き、社会教育の活動について考えを深めることができました。

記念講演においては、「あなたの知らない名字の世界～名字には隠れた日本文化がある～」と題して、水戸市在住の名字研究家高信幸男さんの話を聞きました。

現在、13万の名字があるが、日本人でも読めない名字があるのはなぜなのか、名字が生まれた時代と言葉が違うものや、日本独自の文字、勝手に作ってしまったものなどがあり名字にはそれぞれに隠れた文化があることを伝えられました。

続いてのシンポジウムでは「子どもたちの成長を支えるために社会教育は何ができるか」をテーマに、文教大の金藤ふゆ子教授をコーディネーターとし、子ども達の健やかな成長を支えるために、地域の一員としてどのように関わることができるのか、どのように関わらなくてはいけないのか、3名のシンポジストが事例をもとに論じられました。

分科会は第5分科会に参加し「社会教育委員の役割」をテーマに、社会教育委員会による視点として「子どもたちの健全な育成」に関する提言や取組事例について、2市から取組事例の発表がありました。東京都あきる野市からは、8月に10日間で100Kmを歩く「あきる野サマーチャレンジ」の取組について発表があり、ふるさとを誇りに思う人づくりとして、3つのきょういく（共育、協育、郷育）に取り組まれている内容を紹介されました。また、茨城県ひたちなか市は、社会教育委員が主体的に取り組む会議の進め方について紹介されました。まず会議次第の「その他」項目をテーマフリーの意見交換会にすることから始め、現在では「活動テーマ」を創造することに着目した活発な活動をされており、社会教育委員会会議は「審議会」であるため、「諮問を受けて答申する」ことが私たちの役目であると締めくくられました。

大会参加を通じ、社会教育委員として、充実した活動に邁進するため、地域特性に応じた取組が大切であり必要であると改めて感じることができました。ありがとうございました。

第 46 回中国・四国地区社会教育研究大会徳島大会

広島県教育委員会事務局学びの变革推進部生涯学習課

令和 6 年 11 月 28 日（木）～29 日（金）に徳島市のあわぎんホールで「第 46 回中国・四国地区社会教育研究大会徳島大会」が開催されました。

徳島大会では、「阿波から巡り 共に歩もう！」学び 支え つながる社会教育」のスローガンのもと、「誰もが輝き、活躍できるひとづくり つながりづくり」を研究主題に、基調講演、パネルディスカッション、分科会等を通じて社会教育の活動について、参加者が思いを共有しました。

基調講演では、認定 NPO 法人グリーンバレー前理事長 大南 信也氏が、『偶発性をデザインする』～人口 5000 人の徳島県神山町はなぜ進化し続けるのか～と題して、地方が持続可能な社会を築くための人づくりや地域づくりの実践を語られました。今から 25 年前に神山町で「アーティスト・イン・レジデンス」という事業がスタートしました。豊富な資金や設備を希望するのではなく、片田舎で地域住民の暮らしの中で創作活動を希望するアーティストを対象に、一定期間滞在しながら創作活動を行ってもらうものです。数年後には NPO 法人が設立され、神山町からの委託を受けて、移住支援センターの事業が始まりました。「ワーク・イン・レジデンス」という形で、将来の神山町をどんな町にしたいのかをイメージして、神山町に欲しい人材を逆指名するものです。一般的には、移住希望アンケートは家族構成の次に希望する不動産情報を伺いますが、神山町では、家族構成の次に将来の夢ややりたいことを伺うのです。例えば、神山町にパン屋がなければパン屋をやってみたい方をとるように、神山町が欲しい人材に移住してもらうことで、神山町のデザインを可能にしておられます。このように、「〇〇・イン・レジデンス」という形で、次の世代を見据えた長い時間軸で人や地域の課題を捉え、マーケティングを実践されながら多様な人材を神山町に集め、関係する人材がさらにつながることによって関係人口の偶発性を生みながら、豊かな地域づくりを実践されています。これらの試みが集積し、令和 5 年 4 月には「神山まるごと高専」が開校し、学生や経営者が集う最先端の実践的な学びの場となっています。人づくりが地域づくりにつながる、社会教育の観点からも大変示唆に富むご講演でした。



Ⅶ 令和6年度事業概要

1 会 議

(1) 第1回理事会

期 日 令和6年6月5日（水）10:30～11:30

場 所 呉市役所

内 容 ・令和5年度歳入歳出決算について
・「社教ひろしま」第71号編集計画（案）について

(2) 第2回理事会

期 日 令和7年3月13日（木）10:30～11:30

方 法 オンライン

内 容 ・令和6年度事業報告及び歳入歳出決算（見込）について
・令和7年度事業計画（案）について
・令和7年度歳入歳出予算（案）について

2 事 業

(1) 令和6年度広島県社会教育委員研修会

テーマ ウェルビーイングの実現と社会教育委員の役割
～次世代を担う青少年の育成を通して～

共 催 広島県教育委員会、呉市教育委員会

期 日 令和6年6月5日（水）12:15～16:00

場 所 呉市役所（呉市中央四丁目1-6）

内 容 ・開会行事・表彰式
・講演

演題：「複雑かつ困難な社会課題の解決や持続的な社会の発展に向けて
ーイノベーションを担う人材育成ー」

講師：広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 杉原 満治

・トークセッション・協議

テーマ：「青少年の健全育成に向けた社会教育委員としての役割」

登壇者：呉市社会教育委員会 副議長 土本 敏明

広島市戸坂公民館 館長 熱田 有紀

NPO法人おのみち寺子屋 理事長 柿本 和彦

広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 杉原 満治

コーディネーター：一般社団法人まなびのみなと 代表理事 取釜 宏行

(2) 「社教ひろしま」の発行

趣 旨 社会教育委員をはじめ、社会教育関係者の研修資料とするため、社会教育に関する論説、調査研究、実践事例等を内容として作成し、配付する。

名 称 「社教ひろしま No. 71」

構 成 ・巻頭言

広島県社会教育委員連絡協議会会長 林 孝

・寄稿

広島修道大学 教授 山川 肖美

・実践報告

安芸太田町、呉市、世羅町、府中市、広島市

・令和6年度広島県社会教育委員研修会報告

・表彰

令和6年度全国社会教育委員連合表彰

令和6年度広島県社会教育委員連絡協議会表彰

令和6年度社会教育功労者表彰

・大会報告

第66回全国社会教育研究大会茨城大会

第46回中国・四国地区社会教育研究大会徳島大会

・令和6年度事業概要

発 行 令和7年3月

(3) 表 彰

令和6年度全国社会教育委員連合表彰

呉市 原 俊三郎

令和6年度広島県社会教育委員連絡協議会表彰

福山市 平前 恭子

三次市 畑 博志

三次市 矢野 好子

坂町 松岡 千恵子

3 その他

(1) 全国社会教育連合関係資料 配付

・「社教連会報」(No. 95、96)

・機関誌「社教情報」(No. 91、92)

(2) 他団体との連携（事業の後援）

・第73回広島県公民館大会（令和6年8月8日）

主催：広島県公民館連合会

・第34回遊心書道会展（令和6年11月29日～令和6年12月1日）

主催：遊心書道会

(資料)

広島県社会教育委員研修会（旧広島県社会教育研究大会）開催記録

広島県社会教育研究大会					
開催年度	主管地区	開催会場	開催期日	研究主題・テーマ	
1	昭和 56 年	広島市	広島市中央公民館	10 月 14 日 (水)	社会教育の今日的課題と社会教育委員の役割
2	昭和 57 年	県西部	県立社会教育センター	11 月 5 日 (金)	社会教育委員の任務と役割を明らかにし、その活動の積極的な推進を目指して
3	昭和 58 年	海 田	東広島市中央公民館	8 月 24 日 (水)	社会教育委員の任務と役割を明らかにして、その活動（青少年教育、同和教育、高齢者教育）を積極的に推進していくためにはどうすべきか
4	昭和 59 年	可 部	安佐北区民文化センター	9 月 21 日 (金)	青少年の健全育成をすすめるための社会教育委員の任務と役割を明らかにし、その活動を積極的に推進していくにはどうすべきかを究める
5	昭和 60 年	尾 道	三原市中央公民館	9 月 6 日 (金)	生涯各時期における社会教育を進めていくための社会教育委員の任務と役割
6	昭和 61 年	福 山	福山市中央公民館	11 月 27 日 (木)	人権尊重を基底とした生涯教育の創造
	昭和 61 年	県 (中国・四国 地区大会)	広島市青少年センター 県立社会教育センター	6 月 12 日 (木) 13 日 (金)	学習社会への志向の高まりの中で、生涯にわたってともに学びあう社会教育の推進とそのあり方を考える
7	昭和 62 年	三 次	三次市農協会館	11 月 27 日 (金)	人権尊重を基底にした生涯教育の創造
8	昭和 63 年	広島市	広島市青少年センター	11 月 25 日 (金)	人権尊重を基軸とした生涯学習の推進
9	平成元年	県西部	大竹市総合市民会館	11 月 6 日 (月)	人権尊重を基底にした生涯学習の推進
10	平成 2 年	海 田	海田町海田公民館	11 月 6 日 (火)	人間尊重のゆきとどいた生涯学習の推進
11	平成 3 年	可 部	芸北町民文化ホール	10 月 3 日 (木)	今、ひと・まちが動きだす
12	平成 4 年	尾 道	三原リージョンプラザ	10 月 1 日 (木)	「学び」そして「行動」へ、人づくりはまちづくり
13	平成 5 年	福 山	福山市市民会館	10 月 26 日 (火)	人権を尊重し、差別のない明るいまちづくりをめざす生涯学習の推進
14	平成 6 年	三 次	三次市文化会館	11 月 15 日 (火)	「まちが輝き」「ひとが輝く」まちづくりはひとづくりから
15	平成 7 年	広島市 (兼 中国・四 国地区大会)	広島市青少年センター	10 月 25 日 (水) 26 日 (木)	生涯学習社会の実現をめざした社会教育活動のあり方
16	平成 8 年	県西部	宮島町宮島観光会館	11 月 26 日 (火)	「学社融合」新しい学習空間の創造を！
17	平成 9 年	海 田	豊栄町総合文化センター	10 月 14 日 (火)	生涯学習のまちづくり
18	平成 10 年	可 部	田園パラッツォ	10 月 7 日 (水)	子どもたちを育てるまちづくり
19	平成 11 年	尾 道	三原リージョンプラザ	9 月 7 日 (火)	学びで輝くひととまち
20	平成 12 年	福 山	福山市北部市民センター	9 月 26 日 (火)	夢をはぐくみ、心を育てるひととまち
21	平成 13 年	三 次	みよし公園 カルチャーセンター	10 月 2 日 (火)	21 世紀に生きる青少年をはぐくむ社会教育
22	平成 14 年	広島市	アステールプラザ中ホール	10 月 2 日 (水)	まちぐるみで子どもを育むために

23	平成 15 年	県西部	大野町福祉保健センター	10 月 1 日 (水)	心豊かな地域づくり・ひとづくりをめざして
24	平成 16 年	呉・賀茂 (兼 中国・四 国地区大会)	呉市文化ホール	8 月 26 日 (木) 27 日 (金)	地域住民と行政が協働する社会教育の 在り方を考える
25	平成 17 年	芸 北	千代田開発センター	2 月 10 日 (金)	心豊かな子どもを育むひとづくり, 元気なまちづくり
26	平成 18 年	尾 三	しまなみ交流館	1 月 18 日 (木)	学び 高め 生かす生涯学習社会の実現 をめざして
27	平成 19 年	福 山	福山市神辺町文化会館	1 月 23 日 (水)	学び続けて豊かな人生 住みよい地域
28	平成 20 年	備 北	庄原市ふれあいセンター	10 月 17 日 (金)	生涯学習と地域づくり・まちづくり
29	平成 21 年	西 部	廿日市市さいき文化ホール	10 月 14 日 (水)	社会全体で子どもを育てる

広島県社会教育委員研修会					
開催年度		開催会場		開催期日	講演テーマ
1	平成 22 年	安芸府中生涯学習センター くすのきプラザ		6 月 1 日 (火)	社会教育行政推進における社会教育委員の役割
2	平成 23 年	まなびの館ローズコム (福山市生涯学習プラザ)		6 月 1 日 (水)	地域の教育力と社会教育
3	平成 24 年	大竹市総合市民会館		6 月 1 日 (金)	少子高齢社会対応と社会教育の役割
4	平成 25 年	尾道市しまなみ交流館他 (兼 第 36 回中国・四国地区 社会教育研究大会広島大会)		11 月 21 日 (木) 22 日 (金)	【研究主題】 持続可能な社会の構築に向けたこれからの社会教育の在り方
5	平成 26 年	安芸太田町 川・森・文化・交流センター		6 月 3 日 (火)	東日本大震災と社会教育
6	平成 27 年	三次市民ホールきりり		6 月 2 日 (火)	おの 100 挑戦隊～感動創造の旅 ～想いがつながる 100 km 完歩～
7	平成 28 年	東広島芸術文化ホールくらら		6 月 1 日 (水)	つながりが創る豊かな家庭教育支援を目指して ～今、社会教育委員にできること～
8	平成 29 年	福山市まなびの館ローズコム		6 月 1 日 (木)	地域の教育力を高める社会教育委員の役割 ～子供の学びや育ちの支援を通じた地域づくり～
9	平成 30 年	はつかいち文化ホール さくらびあ		6 月 1 日 (金)	子供の貧困と社会教育
10	令和元年	竹原市民館ホール		6 月 5 日 (水)	人口減少時代の新しい地域づくりに向 けた社会教育の在り方
11	令和 2 年	安芸高田市民文化センター		-	(※開催延期)
12	令和 3 年	(オンライン)		8 月 24 日 (火)	学校・家庭・地域が連携・協働した地域 づくりの実現に向けて
13	令和 4 年	広島国際会議場 (※)		10 月 27 日 (木) 28 日 (金)	【研究主題】 これからの時代を見据えた学びのデザイン ～ニューノーマル時代における社会教育の在り方～
14	令和 5 年	府中市文化センター		6 月 5 日 (月)	これからの時代を見据えた社会教育委員の在り方 ～全国大会をふり返り、今、私たちにできること～
15	令和 6 年	呉市役所		6 月 5 日 (水)	ウェルビーイングの実現と社会教育委員の役割 ～次世代を担う青少年の育成を通して～

(※) 第 64 回全国社会教育研究大会広島大会 (兼) 第 44 回中国・四国地区社会教育研究大会

社教ひろしま 第71号

発 行 令和7年3月

編集及び発行機関

広島県社会教育委員連絡協議会

会長 林 孝

所 在 地 広島市中区基町9番42号

(広島県教育委員会事務局学びの变革推進部生涯学習課内)